

中学校国語科古典指導における「地域教材」の開発試論

—教材「越中万葉」の開発と実践—

米田 猛・松田 明大*

Study on the Development of “Regional Material” for Teaching Japanese Classics in Junior High School
—Development and Practice of Teaching Material “*Etchu Manyo*”—

Takeshi KOMEDA・Akihiro MATSUDA

キーワード：国語科教育，古典指導，地域教材開発，万葉集

Key words：Japanese language teaching, Japanese classics teaching, development of regional teaching material and *Manyoshu* (Japan's oldest anthology of *waka* poems)

1 本稿の目的—古典指導における「地域教材」の意義—

本稿は、中学校国語科古典指導における「万葉集」の指導にあたり、地域教材として開発した大伴家持歌について、実験授業を通して教材化の可能性を探ることを目的としている。

中学校国語科古典指導について、現行中学校学習指導要領では、

古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。(第3 指導計画の作成と内容の取扱い1 (4) のイ)

とある。特に「古典に親しむ態度」について中学校学習指導要領では、

- 古典については、基本的なものに適宜触れさせ、古典に対する関心をもたせるように留意する。(昭和33年)
- 古典の指導については、古典に対する関心を深め、古典として価値のある古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること。(昭和44年)
- 古典の指導については、古典に対する関心を深め、古文と漢文を理解する基礎を養うようにすること。(昭和52年)
- 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統につ

いて関心を深めるようにすること。(平成元年)

- 古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。(平成10年)

というふうな、「関心」から「親しむ」へと変遷している(下線部は引用者)。この違いについて、規工川佑輔氏は、

関心が価値ある対象に接近する構えを表しているのに対し、親しむとは文字通り、いつも接してなじむことである。

と述べておられる*¹。

さらに、学習過程の問題として、

興味・関心→親しみの深まりと考えてよいであろう。古典に親しみを持つに至れば古典学習は一応習熟したと考えてよい。親しむまでには、興味・関心の前段階が必要である。親しみは興味・関心を通してより深められる。

と述べておられる*²。

すなわち「いつも接してなじむ」ことが、「親しみの深まり」をもたらすということになる。

このことを実現するための指導法として、筆者(米田)は、次のような5つの方策を考えている。

- (1) 音読・朗読・暗誦等、声に出して読む機会を多くする。
- (2) 文語調の文章や、作者のものの見方・感じ

*富山大学大学院教育学研究科

方・考え方に対する意見文等、書く活動を多くする。

(3) 地元との関連教材の発掘に努める。

(4) 視聴覚教材を積極的に利用する。

(5) 教科書以外の補充教材を多くする。

また、規工川佑輔氏も、次の4つを示しておられる*3。(下線部は引用者)

(1) 基礎的な読解力の習得による指導法

(2) 古典的な雰囲気の世界に誘い入れる指導法

(3) 古典との対話を主体とする指導法

(4) 古典に関するものや古典を読書活動に広げる指導法

特に(2)については、

郷土の古典にゆかりのある地を巡ったり、郷土に関連のある古典あるいは民話、民謡などを利用したりして方法はいくらでもある。

と、古典指導における「地域教材」の有効性や必要性を強調しておられる。

2 中学校教科書における教材「万葉集」の実相と地域教材の実践との関係

現行(平成18年度版)中学校国語教科書5社の「万葉集」教材は次のとおりである。末尾の○数字は採用教科書数である。なお、同じ歌でも教科書によって表記の異なる場合が見られたので、ここでは『萬葉集1～4』(新日本古典文学大系1～4)(1999～2003 岩波書店)の表記によった。

1 持統天皇

・春過ぎて夏来たるらし白たへの衣干したり天の香具山(巻1-28)④

2 柿本人麻呂

・東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ(巻1-48)③

・近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ(巻3-266)①

3 山部赤人

・天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を天の原振り放け見れば渡る日の影も隠らひ照る月の光も見えず白雲もい行きはばかり時じくぞ雪は降りける語り継ぎ言ひ継ぎ行かむ富士の高嶺は(巻3-317)③

・田児の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける(巻3-318)③

・若の浦に潮満ち来れば濁をなみ葦辺をさして

鶴鳴き渡る(巻6-919)①

4 山上憶良

・銀も金も玉も何せむにも勝れる宝子にしかめやも(巻5-803)③

・瓜食めば子ども思ほゆ栗食めばまして偲はゆいづくより来たりしものそまなかひにもとなかかりて安眠しなさぬ(巻5-802)②

5 大伴家持

・うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば(巻19-4292)②

・春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも(巻19-4290)①

・新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事(巻20-4516)①

・我がやどのい笹群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも(巻19-4291)①

6 額田王

・君待つと我が恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風吹く(巻8-1606)①

7 有馬皇子

・磐代の浜松が枝を引き結びま幸くあらばまたかへりみむ(巻2-141)①

8 大津皇子

・あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(巻2-107)①

9 石川郎女

・我を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを(巻2-108)①

10 防人歌

・防人に行くは誰が背と問ふ人を見るがともしさ物思ひもせず(巻20-4425)②

・父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる(巻20-4346)②

・韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来ぬや母なしにして(巻20-4401)①

11 東歌

・多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだかなしき(巻14-3373)③

・信濃道は今の墾り道刈りばねに足踏ましなむ杳はけ我が背(巻14-3399)①

作者別に見ると11人、歌別には22首である。各教科書ではそれぞれの和歌が関連をもたず、羅列されている。大津皇子と石川郎女の2首だけが相聞歌として関連があると言ってよい。

小川雅子氏は、戦後中学校国語科教科書に採用された万葉集教材について調査され、教科書1冊あたり平均10首の万葉集歌が掲載されていることを明らかにされている*4。しかし、それらは、作者あるいは作歌の状況等が何の関連もたず、単独で示されているのである。実際の学習指導にあたっては、教材として示された各歌を関連させて扱うことは困難で、単独に個々の和歌を扱わざるをえないのが実情である。

そこで、テーマや人物・歴史に基づいた関連のある和歌をまとめて扱うことが、学習者に万葉集に親しませる指導の一方法として考案される必要がある。筆者（米田）はかつて、大津皇子と大来皇女の一連の万葉歌を「二上万葉」として教材化し、指導を試みたことがある*5。おおむね学習者の反応は良好で、万葉歌を通して学習指導要領に示された「古典に親しむ態度」を育成することができたと考えている。「地域教材」は学習者の日常に空間的に近いことが好条件となり、「古典に親しむ態度」の第一歩となりうる可能性が高い。

教材「万葉集」の地域教材は、全国でさまざまな取り組みがなされていることは予想されるが、公刊された書籍等には掲載されないことが多い。

小池保利氏は、東三河に関する万葉歌の教材化を試み*6、その意義について

中学生・高校生時代に郷土が産んだ優れた文人の文学作品にふれ、親しむことは、郷土の歴史と文化を見直すことに通じる。また、郷土への理解を深め、情操を豊かにし、郷土愛を培う上で極めて意義深いものであると思う。

と述べておられるとおり、古典指導における「地域教材」は古典に親しむ態度を養い、さらには、郷土を見直すという内容価値的な観点からも有益なものと判断できる。

3 教材化に際しての留意点

地域の素材を古典指導の「地域教材」として教材化するためには、次のような点についての教育的配慮が必要である。

- (1)「地域教材」に含まれる陶冶的価値（学習者の人間的成長に資する価値）が含まれていて、その価値内容が、その教材を学習する発達段階（学年段階）に適切であること。
- (2)「地域教材」が、何らかのテーマ性や連続性

を有し、単発的な学習にならないものであること。

- (3)「地域教材」に含まれる言語抵抗が、学習者の発達段階や学習経験に適し、その「地域教材」の学習によって、学習者の「古典を読む力」が伸長されること。
- (4)「地域教材」学習のための教材テキスト・資料等が作成しやすく、また、作成のための資料収集も容易であること。

4 教材化を試みる万葉歌

(1) 大伴家持と越中

「越中万葉」と呼ばれる越中にかかわる万葉集歌は337首を数える。また、大伴家持の473首のうち、223首は越中で詠まれている。つまり、「越中万葉」と呼ばれる337首のうち、約66%の223首が大伴家持の詠んだ歌であり、大伴家持が越中万葉歌壇に残した足跡は大きい*7。今回、教材化を試みたのは、この大伴家持の万葉歌である。

大伴家持は、天平18（746）年（29歳）から天平勝宝3（751）年（34歳）までの5年間、越中国守として、越中国*8に滞在した。

家持は万葉集の最終編者であり、掲載歌が集中最多の歌人としても知られている。

この越中の5年間で家持は歌人として大きく成長したといわれている。その理由として、越中の風土が彼に与えた影響は大きい。

家持は自身の歌の中で越中を「天離る鄙」と称している。彼はそれまでの人生の大半を奈良の都で過ごしてきた。その都から遠く離れ、環境も大きく異なる越中は、彼にとって経験したことのない異風土として映ったと考えられる。家持の歌からは、越中の気候や自然に彼が新鮮な驚きや喜びを感じていたことがわかる。

新谷秀夫氏は、その感慨を「異に驚く」つまり「驚異」とともにあったという指摘をしている*9。

(2) 素材分析

越中の自然的特徴の一つとして、ここが日本有数の豪雪地帯であることが挙げられる。雪は越中の代表的な風物である。

今回、教材として取り上げるのは、家持の詠んだ雪歌8首である。そのうち、越中赴任以前に都で詠んだものを2首、越中で詠んだものを6首取り上げることとした。越中赴任以前に詠んだ2首は越中の

雪歌と比較することを意図して学習者に与えるものである。

① 都の雪歌

まず、都での雪歌2首について述べる。

1441 うち霧らし雪は降りつつしかすがに
我家の園にうぐひす鳴くも（巻8）

1649 今日降りし雪に競ひて我がやどの冬
木の梅は花咲きにけり（巻8）

1411は鶯と雪、1649は梅花と雪との取り合わせが詠まれている（1649は、冬枯れした樹木に梅の花のように雪が積もったことを詠んでいるとする説もある）。双方で詠まれているのは雪と春の景物との対比であり、春を待ちわびる家持の思いが読み取れる。

越中赴任以前の都で詠まれた家持の雪歌について、田中夏陽子氏は次のように述べている^{*10}。（下線部は引用者）

雪を中心として詠じるというより、雪は、梅や鶯といった感動の主体となる他の景物や事象を引き立てる役割を果たしている。（中略）雪が叙景の主部となっているものは『萬葉集』には少ない。それは家持歌においても同様である。

田中氏が述べているように、万葉集では雪を叙景の中心として詠んだ歌は少なく、そのため、雪自体の様子や特徴がよく描かれているものも少ないと考えられる。

さらに、この時期の雪歌の特徴として、田中氏は次のことも述べている^{*11}。（下線部は引用者）

また、もう一つ重要なことは、「我家の苑」「我がやど」「庭に降り敷き」と、野外ではなく身近な邸宅のような所を歌の舞台としており、箱庭的な景観の歌となっている点である。

② 越中の雪歌

次に越中で詠まれた雪歌について述べる。

4001 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし（巻17）

4002 片貝に川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む（巻17）

4001、4002は、4000「立山賦」（家持が立山を讃美して詠んだ長歌）の反歌である。

佐々木民夫氏は家持と立山の雪について次のように述べている^{*12}。（下線部は引用者）

越中の雪体験として最も大きいものが、互

年雪をいただく立山の雪であり、さらには立山の連山からの雪解け水の豊かさであった。越中で初めて迎える夏四月、奈良の山々ではとうに残雪もない時なのに、眺めやる立山にはなお雪があり、その神々しくも雪をいただく立山を家持は、「立山賦」として歌わずにはいられなかった。

4001では、夏、立山に積もる雪が歌われている。家持はこの風景を「神からならし」という。そこから、立山の美しさを神秘的なものとしてとらえた家持の視点が理解でき、彼の新鮮な驚きや感動を読み取ることができる。

佐々木氏はこの家持の経験を「知識ではない己が体験を通して接し得た新鮮な『雪』発見であった」と述べている。

また、4002では「片貝の川」の叙景を序詞とし、立山への讃美を歌っている。この歌の「絶ゆることなく」は、前述の佐々木氏が言う「立山連山からの雪解け水の豊かさ」を表したものである。雪だけではなく越中の自然に対する家持の深い観察眼がうかがえる。

4024 立山の雪し消らしも延槻の川の渡り
瀬鑑漬かすも（巻17）

4002と同様、4024も立山からの雪解け水を歌ったものである。家持が馬に乗り「延槻の川」を渡った際に川の水位が高く「鑑」が濡れてしまったことが詠まれている。この歌について野田浩子氏は次のように述べている^{*13}。（下線部は引用者）

家持は越の雪消の水の増水の凄まじさ、水の鋭い冷たさを「川の渡瀬鑑漬かすも」と表現し、鑑に置いた足を通して越の自然に触れている。その水勢に圧倒された家持はこの時完全に彼を取り巻く自然に包容されてしまっている。ここには風流世界も風流士たる仲間も都への志向や単なる鄙ぶりへの興味も入る余地なく家持と自然は接している。

足から伝わる水の感覚はもちろん、激しく水が流れる様子や水の音も家持はとらえていたはずである。箱庭的景観の自然でもなく、4001などのように遠くから臨む自然でもなく、家持が大自然の中で実際に体感した雪の様子が詠まれた歌であると言える。

4079 三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ（巻18）

4079では、雪と春の景物である「霞」との対比が描かれている。この雪は「昨日も今日も」降り続けている雪である。三島野一面に広がる銀世界を家持は見ていたと考えられる。春の訪れを知らせる霞が出てもお降り続ける雪に家持は越中の長い冬を改めて実感していたと考えられる。

5 教材化の視点・意図

富山で生まれ育った学習者にとって、郷土の雪は非常にありふれたものである。改めて雪を見直すという経験は学習者にはほとんどないといってよい。ましてや、冬の生活に支障をもたらす雪に対しては、美しさや気高さを見つける対象にはなり得ていない学習者も多いことが予想される。

しかし、家持は越中の雪の魅力を発見し、新鮮な驚きや感動をもって、それを和歌に表現した。

越中の雪に対する家持の見方や思いにふれることは、学習者にとって郷土の自然を見直す態度の育成につながるものと考えられる。

また、郷土を素材とする古典作品を学習することは、学習への意欲の向上にもつながると考えられる。

過去に自分の郷土で暮らした人々が、どのような暮らしをしていたのか、どのような思いをもっていたのかなどという興味や関心は、誰でも抱くものであり、また、現在を生きる自分自身と比較・検討することは楽しいことでもある。

ところで、家持は自身の歌の中で越中の雪を「み雪」と表現している。この「み」は万葉集中では「三」「美」と表記され、美称を表す言葉である。

本単元の最後に、学習者にはこの「み」の意味について考えさせ、越中の雪を「み雪」と呼んだ家持の心情を想像させたいと考えている。

学習者がこの問題に取り組み、他者との意見の交換を行うことで、歌の中の雪のイメージがふくらみ、深まることにつながると考える。以上の観点から本教材の指導目標を次の3点とした。

- ① 郷土を題材にした大伴家持歌を通して、郷土への理解を図る。
- ② 郷土を題材にした大伴家持歌を通して、古典和歌を理解させ、自力で鑑賞する能力を養う。
- ③ 郷土に関する古典に興味・関心をもたせ、意欲的に古典を読もうとする態度を養う。

この目標を達成できるよう、教材を編成して単元化を行った。今回は単元化を2種類（単元A・単元

B）試み、実験授業を試みている。

(1) 単元A

単元名は「越中万葉～家持と『み雪ふる越』～」である。本単元を構成する万葉歌は、次の3首である。

4079 三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ（巻18）

4001 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし（巻17）

4024 立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬鍬漬かすも（巻17）

中学校の学習者の抵抗としては、

① 句切れ……3首とも、第2句の下に意味の切れ目がある。

② 語句の意味……しかすがに（そうではあるけれども）、神からならし（神の仕業であるようだ）、消らしも（消えたらしい）などが考えられる。

本単元では越中の雪の威厳と崇高な美しさをテーマに教材を編成した。

4079では、「三島野」の平野一面に広がる銀世界が想像させられる。越中の長い冬が家持にとって異風土体験であったことがわかる。

さらに、崇高な美しさをもつ雪として立山の雪を取り上げた。4001の「神からならし」から、この雪の美しさを讃美した家持の心情を理解させたい。学習者にとって立山はほぼ毎日のように見ることのできる風景である。その当たり前風景を新鮮なものとしてとらえた家持の視点に気づかせたい。

加えて、4001の立山の雪は家持にとって遠くから見ることにしかできない存在であった。それを直接、自身の肌で体感することになったのが4024である。この歌からは大量の雪解け水から立山の雪を思う家持の心情が述べられている。鍬から感じられる雪解け水の冷たさ、鋭さが想像できるのであるが、それに加え、家持が五感全体を使って何を感じていたのかを想像させたい。足から伝わる水の冷たさ、鋭さ、視覚からの急激な雪解け水の流れ、聴覚による激しい水の音など、学習者には歌の世界について深く想像させていきたいと考える。

(2) 単元B

単元名は「越中万葉～大伴家持と『雪』～」である。教材化する万葉歌は、大伴家持の「雪歌」のうち、次の5首である。

[a グループ]

1441 うち霧らし雪は降りつつしかすがに我が家の園にうぐひす鳴くも(巻8)

1649 今日降りし雪に競ひて我がやどの冬木の梅は花咲きにけり(巻8)

[b グループ]

4001 立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし(巻17)

4002 片貝に川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む(巻17)

4024 立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬鍍漬かすも(巻17)

[a グループ] は、大伴家持が平城京で詠んだものである。中学校の学習者が感じる解釈上の抵抗としては、

① 句切れ……ともに二句の下に意味上の切れ目があること。

② 語句の意味……降りつつ(このごろはややもすれば、雪の降るような季節であるが)、しかすがに(そうではあるけれども)、鳴くも(鳴くことよ)、競ひて(負けまいとせりあって)、冬木(冬枯れの)、咲きにけり(咲いているなあ)などが考えられる。

一方、[b グループ] は、大伴家持が越中国司として赴任したときに、越中の情景(立山、片貝の川など)を詠んだものである。中学校の学習者の抵抗としては、

① 語句の切れ続き……4001と4024とは、二句の下に意味の切れ目がある。4002は、特に意味の切れ目はない。

② 語句の意味……見れども飽かず(見飽きることがない)、神からならし(神の仕業であるようだ)、あり通ひ見む(通い続けてこの山を見よう)、消らしも(消えるらしい)、漬かすも(漬からせたよ)

などが考えられる。特に「神から」については、大伴家持の立山観を表す言葉として重要である。『日本国語大辞典』では、

神の性格、本性。多く、副詞的に神の性格のせいで、神の品格がすぐれているために、の意に用いられる。

とある。

[a グループ] と [b グループ] を比較すると、次のような違いが指摘できる。

① 雪の扱いが、[a グループ] では「鶯」「梅」の背景として歌われているのに対し、[b グループ] では、直接の対象として歌われている。

② [a グループ] は、ほんの少しの雪を対象に、その美しさを歌っているが、[b グループ] は、越中で見た雪の多さを視覚、触覚を通して歌っている。

単元Aと単元Bとの大きな違いは、単元Aが越中で読まれた万葉歌のみを対象にしているのに対し、単元Bでは越中歌と平城京歌を対比的にとらえさせることを意図している点にある。

換言すれば、単元Aでは、「地域教材」で扱う地域が日常生活の場である学習者の、家持歌に対するとらえ方を問うものであり、単元Bは、家持の「雪」に対する見方の変化の理解を通して、家持歌のとらえ方を問うものである。

6 授業の実際

ここに示すのは、実験授業における主な発問とそれに対する学習者の反応である。

(1) 単元Aの場合

[第1時]

① 「学習のポイント」の説明

学習者には学習を行ううえでの観点として、次の4点を示した。

- ・正しく音読しよう。
- ・歌の大意をつかもう。
- ・越中の雪の情景を想像しよう。
- ・越中の雪に対する家持の思いを考えよう。

② 4079の指導について

学習者に与える教材プリントでは、全て傍注を付している。この歌で傍注を付けたのは「三島野」「霞」「しかすがに」「(降り)つつ」の四か所である。そのうち、「しかすがに」と「つつ」については現代語訳を記した。また、「三島野」の現在の位置、「霞」が春の知らせを示す景物としてとらえられていたことを示した。次に、「しかすがに」に注目させて、学習者にはこの歌が二句切れであることを意識させながら音読の練習を行わせるようにした。

また、傍注に留意させることで、大意の把握もほとんどの者が問題なくとらえられた。学習者2名を指名し、原文と現代語訳とを対比させながら読ませ、歌の大意の確認を行った。

4079について、山口博氏は次のように述べている*14。

雪と霞のとり合わせは、例えば作者未詳の
風交じり 雪は降りつつ しかすがに
霞たなびき 春さりにけり（巻10-1836）
などがある。これは「雪・しかすがに・霞」、
家持は「霞・しかすがに・雪」であり、それも「昨日も今日も」である。家持は越中の風土を確実に
把握すると同時に、都ぶりのパターンが全く適
応できないことも知ったのである。

つまり、都では、「雪が降っている。しかし、霞
が出て春になったよ」というとらえ方であるが、越
中では、「霞が出ている。なのに、昨日も今日も雪
が降り続けている」というとらえ方である。ここに、
越中の雪に対する家持の感慨がある。

家持にとって、越中の長い冬はそれまでに経験し
たことのないものであった。家持は春が訪れてもな
お降り続けるこの雪を新鮮な思いで見つめている。

このことは、巻17-3922の題詞に、

十八年正月、白雪多に零り、地に積むこと数寸
なり。（以下略）

とあるのを見ても、都が越中に比べ雪の降らない土
地であったこと、都びとは「数寸」程度の雪で「多
に零り」という感覚をもったこと、つまり彼らが雪
に対して馴染みの薄かったことが推察できるのであ
る。これは、越中の雪に対する家持の新鮮な見方や
思いを理解していくうえでの基盤となることであ
る。そこで、次の発問をする。

発問1……4079の歌に詠まれた雪はどのような
雪か考えよう。

学習者は、次のような視点で反応を示した。

ア 降雪の時間的連続性

イ 雪の様子

アについては、「ずっと降り続けている雪（22 /
40名）」ととらえた学習者が多い。これらの学習者
は「昨日も今日も」に注目した。この部分は降雪の
時間的連続性を表している。ただ、単にこれが「昨日」
と「今日」の二日間を示しているのではなく、それ
以前から続く越中の長い冬をも思わせるものであ
ると学習者は考えた。

イについては、意見の傾向が二つに分かれた。

第一の意見は、「量が少なく静かに降る雪」で、「少
量の雪（5 / 40名）」「水分の多い雪（3 / 40名）」「軽
い雪（1 / 40名）」などがあり、そのため、雪の降

る様子は「静かに降る（5 / 40名）」「しんしんと
降る（2 / 40名）」「ゆっくりと積もる（2 / 40名）」
「穏やかに積もる（2 / 40名）」「うっすらと積もっ
ている（10 / 40名）」である。

これらの学習者は、量の少ない雪がしんしんと静
かに降り続けている様子を想像した。「霞たなびき」
から、春が近いことがわかり、そう大雪は降らない
だろうと想像したのである。しかし、急に雪が降り
止むわけではなく、それでもなお雪が降り続ける、
そうした北陸特有の季節の変わり目の様子を学習者
は思い浮かべたのである。

第二の意見は、「大雪」であるとするものである。

- ・大雪（2 / 40名）
- ・豪雪（1 / 40名）
- ・春とは思えない天気（1 / 40名）

これらは、「霞たなびき」と合わせて「しかすがに」
に注目し考えたものである。「霞」との逆接の關係
がより明確に表れる「しかすがに」という表現を用
いたのは、冬の最中と変わらないような大量の雪が
降っているという情景を表現しているのであるとい
う考え方である。

家持にとって、たとえそう量は多くなくとも、霞
の出る時期に数日にわたり雪が降り続けていること
は、大きな驚きであったであろう。それが大量の雪
であればなおさらである。

このように、学習者は歌の中の言葉に注目し、自
分自身の雪体験と重ね合わせながら、この歌の世界
を考えていった。

次に、このような雪を見た家持がどのような気持
ちであったかを考えさせるために、

発問2……この歌から家持のどのような思いが想
像できるか。

を発する。

学習者の反応は、次の2つに大別される。

ア 「春を待ち望む気持ち」（春が早く来てほし
い、春の訪れを示す霞に心が弾む など）

（21 / 40名）

イ 都の平城京とは異なり、「霞」が出ているのに、
まだ雪が降り続く越中の風土への驚き、感動な
ど（19 / 40名）

[第2時]

① 4001の指導について

4001で傍注を記したのは「降り置ける」「常夏」
「(飽か)ず」「神からならし」の4か所である。また、

この歌は四句切れであり、それを意識させながら音読の練習を行った。

家持は立山を讚美の対象としてとらえている。立山の雪は、越中における家持の雪体験の中でも特に印象深いものであったことが考えられる。このことについて、佐々木民夫氏は次のように述べている^{*15}。

越中の雪体験として最も大きいものが、万年雪をいただく立山の雪であり、さらには立山などの連山からの雪解け水の豊かさであった。越中で初めて迎える夏四月、奈良の山々ではとうに残雪もない時なのに、眺めやる立山にはなお雪があり、その神々しくも雪をいただく立山を家持は、「立山賦」として歌わずにはいられなかった。(中略)家持は、その立山の雪を「常夏」の「雪」と歌っているのは見る通りで、それはすでに不尽山(富士山)の万年雪を、赤人が「時じくそ 雪は降りける」(巻三、三一七)と、あるいは虫麻呂が「六月の十五日に消ゆればその夜降りける」(巻三、三二〇)と歌うのとは異なる、元来最も無縁な「夏」の季節の「雪」表現なのである。家持が季節表現に繊細な神経を持つ歌人であることは別稿で述べた点だが、その家持自身「み雪降る 冬に到れば」と、当時の一般的認識を前提として雪を捉えているのは見る通りであり、そのことに照らしてみると、この「夏」の「雪」表現が、いかに家持にとって新鮮な印象に基づくものであったかが推察されよう。

因みに、この「常夏」の「雪」の作歌期日は、この年の立夏の日三月二一日から一カ月も経った、暦(いま、二十四節気を指す。以下同。)の上ではいわば夏の盛りであって、暦と現実に見る立山の景との間にある季節感覚の大きなずれを、家持は現実のものとして確認せざるを得なかったであろう。(中略)このように、家持にとって立山の雪は、「夏」になお降る雪、「常夏」にもあるものとして、知識ではない己が体験を通して接し得た新鮮な「雪」発見であったと言わざるを得ず、集中ここにもみある「常夏」の「雪」は、まさに家持のその新鮮な感動によって作り出された表現と言えよう。

家持はこの『常夏』の『雪』を「神からならし」といつている。家持が讚美し、「神」と結びつけた雪がどのようなものであったのかを、学習者の実体

験とも重ねながら考えさせていく必要がある。

発問……「神からならし」に着目して、このときの雪はどのようなものだったかを想像しよう。

この発問に、学習者は次のような反応を示した。

ア 山頂に薄く積もった雪

イ 青空の下にそびえる立山に広がる雪

ウ 立山における神の存在を語る雪

アは、例えば「冬に降った雪がとけて、うすく降り積もっていることによって、上品な感じが出ています。それが都では見られないので風情を感じたのだと思います。」などという反応である。

イは、例えば「太陽の光が雪に反射して光っていることから、その雪が神秘的に見えたから。」「青空の中に雄大な立山がそびえていて、その頂上付近には冬の間積もった真っ白な雪が残っている。空の青と雪の白で、とても美しい立山を際立たせているような雪。」などという反応である。

ウは、「一年を通して残っている残雪は、立山の土地神が自分の品格をあらわしているものであるかのように思えたから。」「山の傾斜は急であり、その山頂に積もる雪は自然の厳しさを思わせる。美しく気高く積もっているような雪。」などという反応である。

以上のような反応は、日頃から目にしている風景や体験と歌とを結びつけ、理解したものである。地域教材の特質を示したものであると言えるが、体験が先行して恣意的な理解にならないようにすることが求められる。

[第3時]

4024について、野田浩子氏は次のように述べている^{*16}。

家持は越の雪消の水の増水の凄まじさ、水の鋭い冷たさを「川の渡瀬澄かすも」と表現し、澄に置いた足を通して越の自然に触れている。その水勢に圧倒された家持はこの時完全に彼を取り巻く自然に包容されてしまっている。

野田氏が述べていることからわかるように、今回の学習で取り上げた他の2首(4079, 4001)と4024とで異なる点は、家持が自然の中に身を置き、直に越中の自然に触れていることである。

そこで、家持の立場から、彼が何を感じていたのかを学習者には考えさせる必要がある。

① 4024について

発問1……このとき家持は五感で何を感じていたのかを考えよう。

この発問に対する学習者の反応の傾向を分類すると、以下のようになる。

ア 肌……鏡から伝わる水の冷たさ、顔にかかる水しぶき→水流の激しさ、空気の寒さがやわらいできている

イ 目……増水→立山の雪の多さ、激流、澄んだ水、早月川が太陽の光でキラキラ輝いて見えた、雪が解けた立山の様子

ウ 耳……激しい水の音→立山の水の多さ

エ 鼻……水のおい、春の緑の香り

学習者の多くがまず注目したのは、雪解け水が流れる川の様子であった。増水し、水に鏡が漬かるほどの川の流れはとても急であったと学習者は考えた。その実際の風景を想像するにあたり、激しい水流の様子やその音、顔にかかる水しぶきなどを想像した。

また、雪解け水の様子として、「冷たい」「澄んでいる」「輝いている」などの意見が見られた。

この意見は、雪解け水の流れるこの時期の川の風景を思い起こして述べた者と、4001の立山の雪の美しさから連想する者とに分かれた。

その後、学習者の想像は川の水から、それ以外の部分へも向かっていく。例えば、気温である。春が近づいてきており、冬の最中に比べ、寒さが和らいできている。それを川の水の冷たさとの比較から考える学習者もいた。

また、春が近づく自然の中には草木の匂いが感じられるとする反応もある。

以上のように、「家持は五感によって何をとらえたか」と問うことにより、学習者は多角的にとらえたものを相互に結びつけ、総合的にこのときの情景の想像を深めていくことができた。

② 「み雪」について

発問2……「み雪」の「み」に当てはまる漢字を考えよう。

田中夏陽子氏は万葉集における「み雪」の意味について次のように述べている^{*17}。

一般的に「雪」に接頭語「御」がついた「み雪」という表現は、単なる「雪」という語に比べて誉めた表現であり、雪の神秘性があらわれているとされる。中古になると、「み雪」は深い雪(深雪)の意として使われることもあるが、『万葉集』

では雪の美称として使われている。

また、田中氏はこの言葉を家持がどのように用いていたかについて次のように述べている^{*18}。

家持の「み雪降る越」という雪の表現は、一見、単なる越の国の雪深さといった実態的な表現に見えるが、国守としての土地讃美や異境での悲哀感といった越中に対する様々な思いが層をなした表現としてとらえたい。

学習者には、こうした本来の意味を初めから教えるのではなく、これまで学習した歌における雪の特徴をふまえ、この「み」に当てはまる漢字が何かを考えさせることにした。そのうえで、この漢字を用いた理由について話し合うことで、本教材における越中の雪のイメージをより深めることができるのではないかと考えた。

学習者が考えた漢字とそれを用いた意味については以下のとおりである。

ア 美……美しい雪

イ 見……見る価値のある雪

ウ 御……敬称をつける。大雪の脅威や立山の雪の威厳に満ちた感じなどから。

エ 味……味わい深い雪

オ 深……深い雪

カ 魅……魅力のある雪

(2) 単元Bの場合

単元Bは、家持歌の「雪」について詠んだもののうち、平城京で詠んだ歌と越中で詠んだ歌を対比的にとらえさせることを通して、大伴家持の「雪」観を考えさせる授業として構成されている。

[第1時]

「歴史的仮名遣い」や「語句の切れ続き」などに注意して音読させるとともに、各歌の大意を把握させる。大意の把握の際には、次の語句に注意が必要である。

しかしがに・鳴くも(1141)、競ひて・咲きにけり(1649)、常夏に・神からならし(4001)、あり通ひ見む(4002)、消らしも・漬かすも(4024)

[第2時]

平城京での家持歌と越中で家持歌を比較し、歌の題材としての「雪」のとらえ方や歌い方の違いについて考えさせるのが、指導目標である。

授業者は次のような学習者の反応を期待している。

① 平城京歌では、「雪」が「鶯」「梅」の引き立て

役になっているのに対し、越中歌は「雪」そのものが歌の中心となっている。(感動の中心が異なる)

- ② 平城京歌では、「雪」を単なる自然現象としてとらえているのに対し、越中歌では、「雪」を神のなせる現象としてとらえている。

学習者の反応を整理すると、次のような傾向が見られる。

ア 平城京歌では、「鶯」や「梅」が中心となる題材であり、雪はその引き立て役であるが、越中歌では、雪そのものが題材であり、歌の中心である。(49/68名)

イ 平城京歌では、身近にある自然(日常)を歌っているが、越中歌では、遠くまで出かけたときの感動を歌っている。(12/68名)

ウ 平城京歌では、冬から春への季節の移り変わりを喜んでいるようであるが、越中歌では、春から夏への雪解けの雄大さや美しさを歌っている。(10/68名)

これらは、前述した田中夏陽子氏の論述(感動の主体の違い、歌の舞台の違い)と通じるものであり、学習者は妥当な解釈を示している。さらには、季節の違い(ウの反応)や作者の行動(イの反応)にも触れていて、平城京歌と越中歌に歌われた「雪」を比較させる学習は、越中で詠まれた家持歌を理解・鑑賞させるのに効果的であると言える。

[第3時]

4011 大君の遠の朝廷そみ雪降る越と名に負へる天離る鄙にしあれば山高み川とほしろし……(以下略)(巻17)

4113 大君の遠の朝廷と任きたまふ官のまにまみ雪降る越に下り来あらたまの年の五年……(以下略)(巻18)

の2首の長歌にある「み雪」について「み」の文字とその理由を考えさせる。学習者の反応は、単元Aで述べた文字と同じである。

それぞれの文字を考えた理由は、次のとおりであった。

- ・美……越中(立山)の「雪」は、神のものを思わせるぐらい美しく神秘的である。(この反応は、4001の「神からならし」と関連づけたものと考えられる。)
- ・御……「神からならし」から神が支配する山であることと、天皇の治めている所である。(大

伴家持は天皇の代理として越中国に来た。)

などが示される。これらも前述の田中夏陽子氏の論述と通じるものであり、中学生の学習者も妥当な理解・鑑賞をしていると判断してよいであろう。

7 学習者の反応から見る教材化の可能性

(1) 単元Aと単元Bとの比較から考察される教材化の可能性

単元Aでは、「地域教材」によって自分の郷土に新たな発見をしている学習者がいる。感想文例を示す。(下線部は引用者、以下同じ)

ア 4001の和歌の立山は神の品格をもっているところにはとても共感します。晴れた日に白い立山を見ると、とてもきれいで雄大だなと思います。また、立山の雪がとけて山がだんだん変わっていくのもすばらしいと思います。

単元Bでは、同一人物である大伴家持が、平城京と越中国とで同じ題材「雪」を詠んでいながら、そのとらえ方に大きな違いがあることを学習者が理解することを通して、郷土の風土に改めて関心を持つ感想が多く見られた。感想文例を示す。

イ 奈良と富山で、大伴家持の雪のとらえ方にこんなにも違いがあることが分かり、改めて富山の「雪」について考えることができました。

ウ 他の土地から来た大伴家持の歌を読むことで、日頃見慣れている富山の「雪」のすばらしさや美しさを感じる事ができた。

(2) 指導目標の達成度から考察される教材化の可能性

本実験授業の指導目標である次の3観点から、大伴家持が越中で詠んだ歌の教材性について、学習者の反応を手がかりに考察する。

本実験授業の指導目標は次のとおりである。

- ① 郷土を題材にした大伴家持歌を通して、郷土への理解を図る。
- ② 郷土を題材にした大伴家持歌を通して、古典和歌を理解させ、自力で鑑賞する能力を養う。
- ③ 郷土に関する古典に興味・関心をもたせ、意欲的に古典を読もうとする態度を養う。

① 内容価値的観点である「郷土への理解」について

この観点では、ほとんどの生徒が郷土を見直した旨の感想を述べている。しかも、単に見直したというよりは、家持歌にある表現を手がかりに見直した

理由を述べている。学習者の感想例を示す。

エ 自分は今までずっと冬になると雪を見てきたし、正直、雪はたいへんで、家持のように、よい印象ばかりではありません。でも、4001の「神からならし」という表現は、神秘的な感じがして、改めて立山を見直してみようと思います。

オ 私は、ずっと富山に住んでいるが、雪の降る様子を家持のように見て、感じたことはなかったと思う。でも、家持の歌を読んで、自分が今まで気に留めることのなかった、「降り積もる雪」「降り続き、やまない雪」「立山に降り積もる雪」「雪解け水の流れる川」などが、いかに美しいものなのかを感じることができたと思う。都に住んでいた家持の視線から書かれた歌を通し、富山の魅力に気付くことができた。

また、「雪」に対する家持の見方について、感想を述べる学習者もいる。

カ 現代人である我々に比べ、家持は雪をまるで風景画を見ているようなとらえ方で、表現力の豊かさを思い知らされた。

キ 五感全てをつかって、和歌をかけるのはすごいと思いました。思ったことが具体的にも抽象的にもかかれています。和歌の魅力を感じました。これらの感想から、本実験授業で示した大伴家持の万葉歌が、「郷土」「歌人のものの見方」等の点から教材性を有するものと判断してよいと考えられる。

② 能力的観点である「古典和歌を理解・鑑賞する能力」の育成について

学習者のとまどいの多くは、古典独特の言いまわしや語句である。

本実験授業に使用した教材には、傍注を付して学習者の言語的抵抗を排除するように努めたが、どの語句にどんな傍注を付すか、さらに検討が必要である。また、音読の効用を述べる学習者がいて、古典指導と音読の有効性についても改めて確認できる。学習者の感想例を示す。

ク 五首を読んで、初めはあまりおもしろそうじゃなかったが、学習していくと次第に意味が理解できてとてもおもしろかった。

ケ 最初は少し戸惑ったが、音読していくうちにだんだん分かるようになった。

コ ふだん、五・七・五で切っているのに、五・七で切れる（二句切れ）ことに違和感を覚

えました。しかし、何回も読んでいくうちに、五・七で切れることに独特の余韻を覚え、七首を楽しむことができました。

③ 態度的観点である「意欲的に古典を読もうとする態度」の育成について
「地域教材」で万葉集に興味をもつことを通して、古典への興味を示した学習者がいる。感想文例を示す。

サ 富山の魅力を再認識するとともに、古典というものに興味がわきました。古典は遠い存在でしたが、急に身近に感じるようになりました。

シ 日頃見慣れている風景が、何となく神秘的なものに感じられて、古典が好きになりました。もう少し、郷土の古典について調べてみたいと思いました。

以上から、本実験授業に使用した教材については、一応の教育的効果があるものと認められる。少なくとも、「地域教材」を扱った本実験授業に対し、学習者が否定的に感想を述べているのが皆無であることは、評価すべきであろう。

【注記】 本稿における万葉集歌の表記は、佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注新日本古典文学大系1～4『万葉集一』『同二』『同三』『同四』（2000～2003 岩波書店）による。

【附記】 本稿は、松田明大「中学校における古典教材の開発－「越中萬葉」の教材化研究－」（2005年度富山大学教育学部特別研究）で開発した教材と新たに開発した教材とをともに、その教材性を確かめるべく実験授業を試みたものである。実験授業は2006年11月に、富山大学人間発達科学部附属中学校の第3学年4学級で実施し、授業は、米田猛・松田明大が2学級ずつ担当した。

富山大学人間発達科学部附属中学校の教職員の皆様、生徒の皆様には、格別の御配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。特に、国語科の有島洋之先生・山田茂晴先生・作道正也先生には大変お世話になりました。重ねて御礼申し上げます。

【注】

*1 規工川佑輔『魅力ある古典の指導入門』（1991 明治図書）14～15ページ。

*2 注1 文献と同じ。15～16ページ。

- *3 注1文献と同じ。28ページ。
 - *4 小川雅子「中学校教科書に採用された万葉集教材の変遷—歌・作者・学習目標・単元・学習の手引きについて—」(『人文科教育研究』XII 1985 人文科教育学会)。
 - *5 米田猛「古典和歌の読み広げの学習—三年・自主編成・万葉集」 巴野欣一編『国語科のキーワード 5 楽しく学べる古文・漢文の指導』(1989 明治図書)。
 - *6 小池保利「郷土に密着した万葉教材の研究総論」1ページ(『解釋學』第9輯 1993)
 - *7 ここに示した歌数は、高岡市万葉歴史館編『越中万葉百科』(2007 笠間書院)の記述による。
 - *8 大伴家持が越中に滞在した5年間は、能登国は越中国に含まれている。
 - *9 新谷秀夫「大伴家持をはぐくんだ『越中』の風土」(『北國文華』6 2000.12)。
 - *10 田中夏陽子「雪歌に見る家持の心象世界」(高岡市万葉歴史館観編『高岡市万葉歴史館論集3 天象の万葉集』337ページ)(2000 笠間書院)。
 - *11 注10文献と同じ。338ページ。
 - *12 佐々木民夫「家持の『雪』」9～10ページ(『盛岡短期大学研究報告』46号 1995 盛岡短期大学)。
 - *13 野田浩子「立山の雪し来らしも—家持に於ける文芸意識と感覚世界と—」33ページ(『古代文学』17 1977)。
 - *14 山口博『万葉の歌—人と風土—15北陸』170ページ(1985 保育社)。
 - *15 注12文献と同じ。9～10ページ。
 - *16 注13文献と同じ。33ページ。
 - *17 注10文献と同じ。353～354ページ。
 - *18 注10文献と同じ。359～360ページ。
- ・長谷川孝士編著『中学校古典の授業—全国実践事例—』(1973 右文書院)
 - ・増淵恒吉・小海永二・田近洵一編『講座中学校国語科教育の理論と実践第五巻 文学的文章II 詩歌・随筆・古典』(1981 有精堂)
 - ・増淵恒吉『増淵恒吉国語教育論集 上巻 古典教育論』(1981 有精堂)
 - ・日本文学協会国語教育部会編『講座／現代の文学教育 中学・高校〔古典編〕』(1984 新光閣書店)
 - ・小和田仁・小川雅子編『国語教育基本論文集成第17巻／国語科と国語教育論 古典教育論と指導研究』(1993 明治図書)

[参考文献]

- ・下中彌三郎編『萬葉集大成(第21巻) 風土編』(1955 平凡社)
- ・中西進『大伴家持第3巻 越中国守』(1994 角川書店)
- ・廣瀬誠『越中萬葉と記紀の古伝承』(1996 桂書房)
- ・高岡市万葉歴史館編『高岡市万葉歴史館論集3 天象の万葉集』(2000 笠間書院)
- ・清田秀博『越中 萬葉地名雑考』(2005 桂書房)